北海道における住生活の変容と居住者の意識

弘前大学人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース
20H1114 和田侑華

1.　研究概要

本研究では、「住生活の変容と居住者の意識を明らかにすること」を目的とした。それにあたり、特に寒さの厳しい北海道の住居・住生活を調査・分析することで、「人々の意識がいかに住生活を変容させ環境に適応してきたのか」、「住居空間の使い方はいかなるものか」を考察した。

戦前までの北海道の住宅は、縁側などの開口部があるすき間だらけのものであったという［野口 1997］。しかし、戦前の北海道の住生活・労働の現状は過酷なものであり、住環境を改善する余力がないのが現状であった。このように、北海道の厳寒な気候が住生活の質に影響を及ぼしていた。本稿では、断熱性に乏しい住居での生活実態や改善の動きを調査し、居住者の生活改善への意識の有様について考察した。

また、北海道の住居の特徴には、居間と水回り・個室などが直結する「居間中心型平面」が挙げられる（図 1 参照）。この間取りは、「十二畳以上の広い居間が確保」でき、「居間の中央に置かれたストーブで部屋全体を暖めること」が可能である［野口 1997］。このように、間取りの特徴に北海道における生活スタイルの特徴が反映されており、暖かさ・断熱性を実現するために、住み手が生活行為を行う場所を工夫してきたことが窺える。本研究においても、調査対象住居の間取りや暖房の位置、生活行為を行う場所に注目し、間取りと動線の関係性についても分析した。

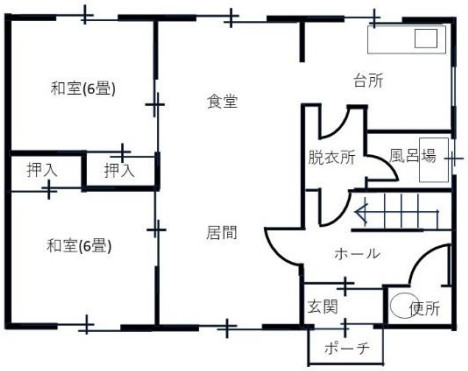

図 1：居間中心型平面の一例（『北の生活文庫 第 5 巻 北海道の衣食と住まい』［越野他 1997］pp.202 の図を参考に作成）

2.　先行研究

本稿では、先行研究を年代順に挙げ、それらを 3 つの観点から分類した。分類ごとに代表的な論文を取り上げる。

一つ目は、〈生活の変化と住居の改善〉の観点である。今和次郎は、住環境の改善において「現実の底に潜む生活の分析」と「その場面に該当する」改善案の提出が必要であるとした［今 1971］。事実としての生活環境上の課題を踏まえたうえで、住環境の改善策をとる必要性を指摘した点が特徴である。

二つ目は、〈住居・居住地変更の意義〉の観点である。古家信平は、住居に変更を加える要因として、当時の流行、収納場所の確保、人との付き合いを挙げた［古家 2008］。また、宮内貴久は、住居・居住地変更の要因を「社会的要因」、「自然的要因」、「信仰的要因」に大別し、社会的規制や自然環境、信仰習俗が屋敷地の選定に与える影響について指摘した［宮内 1991］。これらの先行研究は、居住地選択・増改築の動機や目的に関して、居住者を取りまく諸要因を指摘しているところに特徴がある。

三つ目は、〈住居空間への意味づけ〉の観点である。坪井洋文は、住居空間を「喜怒哀楽という感情が集中的に発せられる空間」と定義づけ、家族間の喜怒哀楽を抑制・処理することは、家の秩序維持に関わる重要なことであるとした［坪井 1985］。祭祀等の伝統的慣習と住居との関係性などに言及し、住居を精

神的交流の場と捉えているところに特徴がある。

以上の先行研究に共通するのは、居住者が住居を〈どのように使うか〉・〈どう過ごすか〉という観点である。本稿では、居住者の住居に対する価値観や意識の表れである「語り」、住居の動線・間取り等の資料をもとに、自然環境との折り合いや居住者の住居に対する価値観・欲求に注意した。

3. 研究の方法

本研究の調査地は、北海道の 4 市町(川上郡標茶(しべちゃ)町、釧路市、旭川市、帯広市)である。4 地点とも冬期の気温は氷点下に達し、厳しい寒さである。

本研究では、北海道の 4 つの住居(〈住居①〉～〈住居④〉表 1 参照)に関して、居住者 4 人(A、B、C、D　表 2 参照)に聞き書き調査を行い、語り手の住居に関する経験や所見を聞いた。さらに、住居外観・内部の写真や間取り図を用いることで、住居内の動線や空間の使い方を視覚的に捉えられるよう工夫した。

住居	建築年代	所在地	居住者
①	1940 年代以前	標茶町磯分内	A
②	1970 年	釧路市武佐	A・B
③	1972 年	旭川市豊岡	C・D
④	2019 年	帯広市西 16 条	B

表 1　調査対象住居概要

話者	生年	職業	話者同士の関係性
A	1942 年	元 JR 北海道職員	A・B が親子関係
B	1974 年	家電量販店員	(A が父親、B が息子)
C	1977 年	看護師	C・D が親子関係
D	1948 年	元空調設備整備士	(C が娘、D が父親)

表 2　話者概要

4　事例の紹介と分析(一部抜粋)

4-1 住生活の変容と居住者の意識変化

【事例 1】　厳寒の中の生活

話者：A(1942(昭和 17)年生)　　**事例年代**：1940～50 年代

事例の背景：当時 A が居住した**〈住居①〉**は、父親の仕事の斡旋や家族の諸々の面倒を見る「親方」と呼ばれる者のつてで住み始めた。

話者 A の語り：冬期の入浴について

A「少し寒いくらいなら、走って(屋外にある)風呂まで行って、また走って戻って来る。身体なんて洗えない。寒くて、ただ風呂に浸かるだけ。でも本当に寒いときは、外にある風呂なんか入れない」

A「したらな、温泉入りに行くの。それが楽しみ。垢だらけだったから、相当しばらく母親と一緒に女風呂入って身体洗ってもらってた。女風呂入ることもそんなに気にしてられない」

分析：経済的理由、父親の生業の面で A は現状の住環境を受入れざるを得ない状況に置かれており、社会的要因(職業上の人間関係・近隣住民との関係など)が、住居や住環境の改善を阻止する場合があると考えられる。また A にとっては、温泉に行くこと、身体を十分に洗うことが貴重な体験であった。このように住環境を容易に変更できない場合、住生活に対する不満足を住居以外での体験で補う場合があ

る。

【事例 2】厳寒を克服する動き

話者：C(1977(昭和 52)年生)、D(1948(昭和 23)年)の 2 名。娘・父の関係にある。

事例年代：1989(平成元)年

事例の背景：本事例で取り上げる**〈住居③〉**は、1974(昭和 49)年の建築以来、数回の改築・改修を経て、2023 年現在も D とその妻が住み続けている。

事例概要：1989(平成元)年に改築工事を行った。その目的の一つは、断熱性を高め室内を暖かくすることであった。改築により、窓を床面から遠ざけたり勝手口を無くすことで開口面積を削減したり、電気給湯器、ユニットバスの導入など水回りの改修を行った。世帯主である D が空調設備関係の仕事に従事しており、大工による工事に加え D が自ら改修した箇所もある。

分析：本事例は、専門の技術を持つ大工や世帯主による改修工事の事例であり、住環境の改善に対する居住者の希望として、断熱性・保温性向上が見られた。世帯主や大工が技術を持っていたこと、金銭的にも工事の手配が可能であったことなどの可能性を見いだし、改善への意欲を高めていたことが読み取れる。つまり、大工などが持つ〈技術的側面〉と家計状況等の〈生活に対する余裕〉の二つが居住者の住環境改善に対する意欲の高まりにつながると考えられる

【事例 3】「住み心地」の探求

話者：B(1974(昭和 49)年生)　　**事例年代**：2021(令和 3)年～現在

事例の背景：本事例で取り上げる**〈住居④〉**には、B が飼い猫 4 匹とともに居住する。エアコン、パネルヒーター、石油ストーブ、床暖房、こたつ等の暖房設備が充実しており、冬でも薄着で過ごしている。

事例概要：B は**〈住居④〉**に住み始めた当初、細かい汚れをこまめに掃除していた。しかし、猫を飼い始めてからは、徐々に〈猫のための家〉へと変化していった。例えば、ソファに引っかき傷が付くことを受入れ、覆っていたカバーを取り外したり、猫のおもちゃ・居場所を増やしたりしていった。

分析：住環境に求めるものが、自身の生活環境→ペットの生活環境整備の順で転換していた。また、住居内の暖房設備が整っており、寒さを克服する必要がなかった。これらのことから、「住み心地」の追求は暖房設備などが整い生活に余裕が生まれた先の段階のものであるといえる。

4-2 居住者の人間関係と住生活

【事例 4】「居間中心型」の間取りと空間の使い方

話者：B(1974(昭和 49)年生)　　**事例年代**：1980 年代～1990 年代前半

事例の背景：本事例で取り上げる**〈住居②〉**は、夫婦の個室と居間は廊下を介さずつながっている。さらに、戸は開け放し、居間と各部屋は一つの空間のようになっていた。また、子ども部屋、夫婦部屋、居間に各 1 台テレビがあり、B は子どもの頃の家での過ごし方として、テレビを観ることを挙げている。

話者 B の語り：

B「(居間のテレビだけではなく）両親の部屋にもテレビあって、父親(A)が居間のテレビを見てるときは、(夫婦部屋の）母親の布団で寝っ転がって見たい番組見てたな」

B「昔から結構母親とは仲良くて、普段から話したりすること多かったけど、父親(A)とは仲いいわけではなかったし、そんなに話さない」

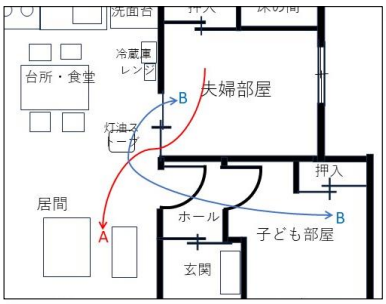

図 1：A と B の動線。A が居間にいるとき、B は居間を避け、自室か夫婦部屋で過ごす。

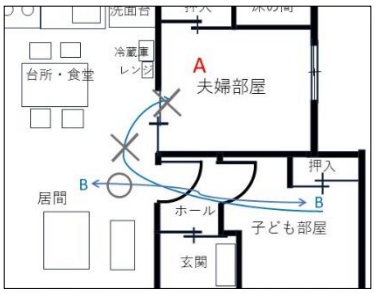

図 2：A が夫婦部屋にいるとき、B は夫婦部屋には行かず自室か居間で過ごす。

分析：父－息子、母－息子という居住者の関係性が、住居のどこで過ごすか・何をするかということに影響していることを示した事例であり、居住者の親疎により動線が決定していることが分かる。また、夫婦部屋と居間が廊下を介さずにつながっているという間取り・戸を開け放つ習慣も背景にあり、夫婦部屋と居間の往き来が容易であった。このことから、間取り・住居の使い方に関する習慣も、動線決定の要因になり得ると考えられる。

4. おわりに

本研究の目的を再確認すると、「住生活の変容と居住者の意識を明らかにすること」であった。

まず「住生活の変容」に関して、北海道の住生活は厳寒の状況の受入れから始まり、増改築などを通した克服、更には趣味の空間やプライバシー空間の確保へと変遷をたどっていった。その過程で見られた「居住者の意識」には、①厳寒の中での過酷な生活経験を現在の住生活に生かす意識、②生活改善の可能性を見いだし、改善後にさらなる改善を目指す意識、③住生活改善の過程における家族間の立場・役割の自覚、④住環境を取り巻く人間関係・他家との比較の意識があることが確認できた。

以上を踏まえると、住生活の変容は、居住者間の親疎、住居を取り巻く自然・社会環境など様々な要因が絡み合って起こるものだといえる。総じて、寒さの克服や利便性向上を目指すことが前提にあり、その過程で、上記に挙げた居住者の住居に対する意識が見られた。

参考文献：今和次郎「住居感情について」（今和次郎『住居論　今和次郎集　第 4 巻』ドメス出版、1971 年、pp.186-190)※初出：『家庭科学』1951 年／坪井洋文「住居の原感覚―喜怒哀楽の共有空間―」（坪井洋文他『日本民俗文化大系　第 10 巻　家と女性－暮らしの文化史』小学館、1985 年、pp.183-220）／宮内貴久「村落空間の構成と屋敷地の選定」(社会民俗研究会『家と屋敷地　社会民俗研究　第二号』社会民俗研究会、1991 年、pp.17-30)／古家信平「家の構成と暮らし」（古家信平他『日本の民俗 5　家の民俗文化誌』吉川弘文館、2008 年、pp.103-173)／野口孝博「新しい住まいの様式」(越野武・野口孝博他『北の生活文庫 第 5 巻 北海道の衣食と住まい』北海道新聞社、1997 年、pp.185-251)